
箱庭で異彩を放つ花 ローズ・レクチャー伝

undervermillion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭で異彩を放つ花 ローズ・レクチャー伝

【Nコード】

N3259X

【作者名】

undervermillion

【あらすじ】

「世界を震撼させた、あの大量失踪事件、通称「カオスワールド事件」。

あの事件を解決したローズ・レクチャーの伝記を、異世界チート作家である、私こと「斑鳩茂市」が余すことなく書き記すのだ。

売れないはずがあるまい」

「……。先生に、もう少し文才があればですが」

はじめに（前書き）

初めてのオリジナル長編です。

伝記物ですが、作者「斑鳩茂市」先生が当事者のひとりであるため、いろいろと残念な事になっています。

はじめに

私はこちらの世界へ移動してから、何年経過しただろうか。ああ、私のことなどどうでもよい話だった。

この、「まえがき」では、ふたつの事を説明しようと思う。

一つめは、この作品の主人公、ローズ・レクチャーのことである。読み進めれば明らかになるが、彼が、あの「カオスワールド事件」を解決したことは事実である。

そちらの世界ではこれまで明らかにされなかったことだ。

事件が、皆が知るような解決をしたことよって、誰が解決したかと言うことは、それほど重要ではなくなったからだ。

事件を解決した本人にとっても、自分が解決したことを知ってもらおうとは思っていないはずだ。

何故なら、彼が望んであの事件を解決した訳ではなかったからだ。

彼にとって、あの事件の解決は、ついでのようなものだったからだ。したがって、大勢の読者が知りたいと思う、何故、彼が事件を解決したのかは、彼の物語の中ではついでのようなものになってしまう。だが、最後まで読んでもらった読者なら、私の話す内容が理解してもらえると信じている。

そして、二つめは、この物語の構成についてである。

あの事件の事を話すのであれば、事件開始直後から話を進めても、本来ならば問題はないはずだ。

しかしながら、この物語は、ローズ・レクチャーの物語である。

そのため、事件よりかなり前の、彼が少年のころから話を進める必要がある。

もし、あの事件の経過が知りたいのであれば、第2部から読み始めてもらってもいいのだが、彼を取り巻く環境が理解できないため、結局第1部から読んでもらうことになるだろう。

読んでもらえれば、少年時代から話をしなければならぬ理由も理解してもらえると信じている。

とりあえず、私が「まえがき」で書くべき内容は、書いた。後は、本文をお読みいただきたい。

第 1 話 ルナスと呼ばれる世界には、魔法が存在していた。(前書き)

この話は、本文にもあるとおり、作品世界の背景です。

それほど長くは有りませんが飛ばしてもらってもかまいません。

第 1 話 ルナスと呼ばれる世界には、魔法が存在していた。

この本を手にしてしている読者であれば、「カオスワールド事件」に関心を持っているだろうと考えている。

そのため、この事件が発生した舞台となった世界の背景についても、ほとんどの読者はご存じだと思う。

これからの文章はルナス世界を知らない読者や確認しておきたい読者以外は、読み飛ばしてもらって構わない。

特に、魔法学園中等部で「歴史」の講義をしつかり受けているならば、間違いなく必要だろう。

この世界ルナスは、地球と異なるところに存在する。

この世界は、創造神ルナスが7日かけて作り出したと伝えられている。

ここら辺の話は、名前こそ違つが、地球の各地で伝えられている神話とあまり変わらない。

地球と大きく変わるのは、魔法の存在であった。

ルナスの世界では、魔法という存在が当たり前に使用されていた。

神が、世界を創造し、事象を改変するために用いた技であると。

その技は、人間にも伝承され、使用されていたが、やがて問題が発生する。

魔法使用者の、俗に言う「凶暴化」である。

魔法とは、事象を改変するために世界に存在する「魔素」を操作することで、事象を改変する。

その代償として、脳内神経に魔素の素粒子（原子を構成する素粒子とは異なる）通称「残骸」が蓄積することで脳に異常が発生する。これが、「凶暴化」の原因である。

創造神は世界の枠外にいたため、魔素の影響を受けることは無かったと考えられているが、この世界に生じる人々にとっては、無視できない問題であった。

人間が使用する魔法が強大化するにつれ、戦乱が発生し、人類自体が絶望の危機を迎えた。

それを防いだのは、神の力であった。

神が行使した魔法「概念魔法」で、世界のシステムを改変したのである。

「概念魔法」により改変したのは、魔法の発動による残骸についてであった。

魔法行使後に残った残骸は、世界に拡散していった。

拡散した残骸は、地中に沈んでやがて元の魔素に戻っていく。

この概念魔法の行使以降、人類は絶望の淵からよみがえった。

しかし、神の存在は、この概念魔法「浄化」を境にして、歴史から姿を消すことになる。

概念魔法により、世界が平穏化するとともに、魔法は新たな時代を迎える。

制限無く使用することが可能となった魔法により、文明がかつて無いほど発展していった。

その一方で、人類に対して新たな脅威が産み出されていった。

魔物の発生である。

魔物の存在が最初に確認されたのは、概念魔法により、人類の凶暴化が収まってから約100年が経過した頃であった。

中央大陸の最北部、溶けない雪で一年中覆われた地域から発見されたときは、始めから存在したと考えられていた。

しかし、やがて大陸各地に様々な魔物が登場することで、現実は無くなったことが知られたとき、対魔物対策の魔法の研究が始まった。研究の結果明らかになったのは、魔法の使用により地中に蓄積された残骸が魔素への還元を追いつく前に生物に摂取されたことで、魔物に変異したことが明らかになった。

多くの国々は、魔物を撃退することで問題は解決すると考えて次々と攻撃魔法を開発しては魔物を退治していった。

なんとか、人類の生存圏を大陸内に確保したとき、魔を統べる存在が登場する。

魔王の誕生である。

魔王が誕生した経過ははつきりと知られている。

大陸北部の港湾都市モルスクで魔法研究を行っていた女性がいた。名前をアルヴァ・ウルクルターゼと呼ばれていた。

アルヴァは、他の魔法研究者達が、モンスターを退治するための方法論を研究していたのとは異なり、魔物の研究を中心に行っていた。アルヴァの研究の結果、魔物は、概念魔法が発動される前の人類と同様に、脳内に魔素の残骸が集積されており、これが「概念魔法」が発動された証拠になった。

アルヴァはさらに研究を進め、どのようにして魔素の残骸が集まるのか、これらの魔物がどのような行動を行うのか、そして魔物を操ることが出来ないかという研究を進めていった。

アルヴァは、後に「暗黒魔法」と呼ばれることになる魔法体系を完成させ、魔を統べる存在、「魔王」となった。

アルヴァは、自分自身を普通の人間から、魔素の残骸で体を生成し、世界で魔法が使用され続ける限り自分が存在することが出来るよう、体を作り換え、不老不死の存在となった。

魔王となったアルヴァは最初に魔物が発見された地域に城を建設し、魔物の国ネグザスを建国する。

ネグザス自体は、他国に攻め込むことをしなかったが、ネグザスを攻撃した国々に対して、城を壊し、国王を倒すことで、適度に戦乱を起こし、魔法を発生させ、さらに魔物を産み出していった。

この事態が1000年ほど続いた後、名もない賢者により新しい概念魔法「召喚」が開発される。

概念魔法「召喚」とは、異世界から「勇者」と呼ばれる存在を呼び寄せて、「魔王」を倒す存在となる魔法である。

魔法の発動には、1000人が毎日魔力をつぎ込み、1年でようやく発動する大がかりな内容である。

実際の魔法の行使は、国家規模でしか使用することが出来ない魔法である。

概念魔法で魔王を倒す存在として呼び寄せられるため、地球の一般的なRPGのように、魔王は倒される。

異世界から召喚された者は、召喚元の世界では、普通の人間だったようだが、概念魔法により強力な力を身につけていた。

この概念魔法が、当時の魔法の水準を超越した技術で作られていたこと、この世界には、「他の世界」という概念が無かったことから、この概念魔法も神が作ったものと、現在では考えられている。

証明することは、神が現れないことにはわからないのだが。

だが、アルヴアはしたたかであった。

アルヴアは、部下の1人に暗黒魔法を伝授させて「魔王」にしたて、自分を「大魔王」として「勇者」と「魔王」の様子を伺った。

やがて、概念魔法のとおり勇者が魔王を倒すと、アルヴアは召喚された勇者に「魔王を倒しても元の世界には戻れない」とそそのかし、勇者が召喚した国を滅ぼさせると、暗黒魔法の力を与えて、新しい「魔王」に就任させ、支配下に置いていた。

アルヴアは、元勇者が得た力を解析することで、自らの力にしていた。

そして、勇者が登場するたびに魔王が倒され、勇者が新しい魔王となるということが繰り返された。

変化が訪れたのは、1人の村娘が冒険者になったことがきっかけとなった。

村娘は、勇者にあこがれて冒険者となった。

旅の途中で、勇者が魔王を倒して新たな魔王となったことを知ると、魔法の研究に励み、新しい概念魔法「帰還」を産み出す。

新しい概念魔法「帰還」は、魔王となった勇者を元の世界に「帰還」させる魔法であり、この世界で得られた力を失わせることも可能だ。魔王に対して行使した「帰還」より魔王はこの世界から消失し、アルヴアも概念魔法により消失した。

アルヴアの消失により、ネグザスも消失し、再び人類の脅威は消え去った。

荒廃した大陸は、やがてクレルダン王国が統一し、魔物の存在は残

るものの、ひとまず人類に再び平穏な時代が訪れた。
ここまでの混乱により、魔法の技術はかなり失われ、近年魔法学園の創設により、ようやく国を挙げての研究開発が進み始めた。
このような時期に、ローズ・レクチャーが登場した。

「先生（笑）、この内容は魔法学園中等部での講義録、「歴史について」を適当に切り貼りしていませんか？」

第1話の原稿を読み終わった私に対して、青い髪の優男風の青年が、ため息と共に感想を漏らす。

「第1話から剽窃とは情けないです」

先ほどの青年と同じような顔をしたもう1人の青年、こちらは長い髪を後ろで束ねていた、が悲しそうな表情で頷く。

「剽窃とは違う。ちゃんとしたオマーージュだよ、インスパイヤだよ」

私は、ありのままの事実を述べ、剽窃疑惑を完全否定した。

私は、異世界チート作家だ。

この程度の誹謗中傷など、問題ない。

「では、巻末にちゃんと参考文献リストを添付してくださいね」

「あらかじめ著作権者の了解をとってくださいね」

「それと、引用した文献の使用料は印税からきちんとして落とすからね」

「・・・」

私は青年達の指摘に謙虚に頷いていた。

第 2 話 倒れていた子どもについて、村人は誰も知らなかった。

ローズ・レクチャーという人物の出生については、誰も知ることはできない。

彼の存在が、最初に知られたのは、クレルダン王国の西部地区にあるレナロダという村の前で、子どもが倒れているのを近くの村人が発見したことによる。

発見されたとき、子どもはこれまでの記憶を完全に失っていた。結局、彼の記憶が取り戻されることはなかった。

このため、彼がいつ何処で産まれたのかは、彼の両親以外わからないのだが、今日まで彼の両親を名乗り出たものは存在しない。

子どもは、黒目黒髪をしていて、この地域ではあまりみられない特徴であったが、全く存在しないわけでもないのです、村人達は不審に思わなかった。

村人達は、それよりも、なんとかこの子どもを助けようとして、倒れていた子どもを村長の屋敷に運んでいった。

子どもが村長の家に運ばれた理由は、子どもが見知らぬ存在だったので、人が集まりやすい場所で確認するためと、ここには簡易ではありながらも医療設備が整っていたからである。

村長は、運ばれてきた子どもの体を観察する。

村長は、かつて王都で学問を学んだこともあり、周囲から一目置かれる存在であった。

村長が子どもの体をじっくりと調べた。子どもの体は汚れていたが、大きなケガもなく、倒れていた原因は空腹によるものと推測した。

子どもの状況を観察していた村長はとりあえず、子どもに食事を与えた。

とはいえ、子どもは気を失っていることから、果物を細かく砕いて飲み込みやすいように加工し、少しずつ口に入れる。

子どもは、翌日の朝には目を覚まし、夕方までには話ができるほど回復していた。

子どもは、自分の状況を確認して、助けしてくれた村人達に感謝した。しかし、村長からこれまでの経過を聞かれると、しばらく考える様子を見せたが、結局「何も思い出せない」と答える事しかできなかった。

数日が経過し、子どもは歩くことが出来るほど体力が回復した。

村長に呼ばれた子どもは、改めて村長にお礼をいうと、なんとか雇ってこないかと頭を下げて頼み込んだ。

村長は、子どもの年齢にふさわしくない態度に思わず驚愕した。

子どもは、自分を守るべき存在がないことを理解し、自分が自分で稼いで生活しなければならぬことを理解したのだ。

判断すべき材料である、これまでの経験を失った状態で。

村長は、反射的に子どもの願いを聞き届けた。

一方で、村長は子どもが大変高い教養があるのではないかと推測した。

そのため村人に、少年が発見された周辺を搜索するよう依頼し、少年の身元が明らかになるものがないか調査していた。

結局、子どもの身元がわかるものはなく、また子どもの足跡も付近の村とは関係のない森へ続く道の途中で切れてしまっていることから、どこから子どもが現れたのかわからなかった。

念のため村長は、徒歩で3日以上かかる付近の村々に少年の特徴を伝えた手紙を送り、調査をお願いしていた。

これも、結局徒労に終わった。

念のため、都に住む友人に、行方不明の子どもの噂が無かったか問い合わせたりもしたが、返事は返ってこなかった。

別に、私が無視した訳ではない。

締め切りに追われて忙しかったからだ。

現に、一年後、私は村長に話を聞くため、締め切りから逃れるように、この村を訪れている。

子どもは、自分の名前ですら忘れており、子どもを呼ぶときに不自由するという理由から、村長はローズ・レクチャーという名前を子どもに与えた。

子どもは喜んで頷いた。

村長は、ローズの扱いをどうするか悩んでいた。

結局、村長は自分の世話を行わせることにした。

ローズは、記憶や知識は欠けていたが、かなり頭が良いらしく、すぐに物事を吸収していった。

そして、わがままを何一つ言わず、村長の言うことに従っていた。

村長には娘がいた。

娘は7歳で、ローズと同じぐらいの年齢だと思われていた。

そして娘は、ローズよりは少し背が小さい。

ローズは、村長の娘に対して、村長と同じような態度で接していた。

ローズは、驚くべき事に、子どもながら自分の立場がわかっているようだ。

食事は、他の使用人と一緒にとり、寝室も使用人と同じ部屋で休んでいた。

この子どもは使用人の息子で、何かの事情でこの村にたどり着いたのでは無いかと、村長は推測するようになった。賢くて、従順であるならば、今のままで問題はあまるまい。

村長は、3ヶ月程度でそのような結論を下した。

村には、文字の読み書きを教える元冒険者がいた。

昔は、王国内を旅する冒険者であったが、引退して、子ども達に文字を教えることで生計をたてていた。

彼は、村長が王都で募集した。

冒険者は、基本的に若い間にしか勤まらない。

年を取った冒険者は、店を開くか、技術を教えるか、誰かに使えるか選択することになる。

一生悠々自適の生活ができる冒険者など、ほとんどいない。

村長は、娘と一緒にローズに読み書きを学ばせたのだが、半年ほどで元冒険者からお願いされた。

「自分と同じぐらい読み書きが出来るようになったので、ローズに教えることが無くなった」と。

村長は、ローズを呼び出して確認したところ、授業を受けるのにお金がかかるので早く覚えることが出来るように努力したと答えた。

村長はため息をついて、今後どうしたいのかを尋ねると、ローズはしばらく考えて、家の仕事がないときは、商売の勉強をしたいと答えた。

村長は村にある雑貨屋の主人と相談し、ローズに主人の手伝いをさせることにした。

村人は、ローズの事をかわった子どもだと思ったが、それ以上の事

は考えることはなかった。

すでに、村人の一員としてみなされていた。

そして、少年が村の入り口で倒れているのを発見してから一年後、
1人の少女がこの村に現れる。

第 3 話 少女の装備は、この村を訪れるに足らず、あまりにも軽装だった。

「呼ばれたのは、構わないけど、ちゃんとしているのかな」

金色の長い髪の少女は、目の前の村を前にして一言つぶやくと、入り口の門をくぐっていった。

「こんにちは」

少女は、門に立つ武装した男から、声をかけられる。

「ああ」

少女は、片手を挙げて返事をする。

「見知らぬものだな、出身と名前を聞かせてもらおうか」

男は、手にした槍を少女の先に突き出す。

これから先を、通させないための牽制だ。

殺気は全く込められていない。

「セリエだ。ゼリンクラから来た」

「ゼリンクラか。村長の知り合いか？」

「いや、私の知り合いが、村長の友人らしい」

少女は、首にぶら下げていた、銀色の鎖を引き寄せると、小さな銀色のメダルが現れた。

「冒険者か」

男は、少女の周囲を改めて観察する。

男が少女の周辺を見渡しても、少女の周辺には誰もいないことに気がついて驚愕した。

モンスターが登場するこの世界では、一人旅というのは極めてまれな事である。

町の周辺で、弱いモンスターを倒したり、薬草を採取したりする程度であれば問題ないが、数日も一人旅を行うことは自殺行為だ。

普通であれば、馬車で移動したり、徒党を組んだりするものだ。それは、戦闘に特化した冒険者であっても例外ではない。

普通の間では通常、一定以上のモンスターには単独で勝てないのだ。

まあ、私のようなチート能力でもあれば、問題ないが。

・・・今は、私の事は置いておこう。

一年前に、倒れた少年が村の前で発見されたのは、本当に例外である。

いまだに少年が倒れていた理由は謎のままだった。

少女がひとりで、他の村から来られるはずもないと考えた男は、視線を少女の装備に移動した。

少女の武装は、腰にぶら下げた小さなナイフしか見つけることが出来なかった。

そして服装は、村人と同じような格好であった。

そして、少女が持っているのが小さな背負い袋だけであることを確認すると再度驚愕する。

旅をするには、少女の装備は軽装備すぎるのだ。

近所で買い物を行うくらいの装備品だ。

そして、服装は全く汚れていない。

数日でも旅をすれば、嫌でも汗のにおいが服につく。

毎日着替えをして、川でキチンと水浴びを行わない限り、臭いは取れない。

一体この少女は、何者なのだろう。

男の中で延々と続く、思考の迷宮を打ち破ったのは少女の声だった。

「通ってもいいかな」

「……ああ、すまん」

男は、槍を上上げると一礼して少女を見送った。

「何者なのだ、いったい……」

「先生（笑）は、まだですか？」

「ああ、先生（笑）はまだだ」

先ほど、村に入った少女とこの村の村長が、村長の屋敷の中で優雅にお茶を飲みながら、話をしていた。

村長は、普段は村の作業がしやすいよう、軽装で過ごしていた。

村長とはいえ、300人ほどの小さな村だ。

自分自身が40歳にならないこともあり、肉体労働に参加することもある。

だが、今日は客人対応ということもあり正装に着替えていた。

一方で少女は、先ほどまで身につけていた姿のままである。

ちよつとみただけでは、村の中で生活する他の少女達とあまりかわらない。

しかし、少女の優雅な姿勢と態度から、生じる感覚はどこかの貴族と変わらない存在感を示していた。

当然、歓談をするだけの状況なので、威圧感とかは現れない。

「……巻き込まれましたか？」

「そうですね」

2人とも笑いが出るのを抑えるように我慢していたが、

「くくく」

「ははは」

抑える事が出来なかったようだ。

「さすが、先生（笑）ですな」

「そつだな」

「楽しそうですね」

黒目黒髪の子どもが2人の前に現れると、「失礼します」と言いながら、お茶用のお菓子を差し出した。

質素だが、清潔感あふれる服装は、その年齢にかかわらず、きちんと家の手伝いを任されていることを示していた。

「ああ、そつだな」

村長はお菓子を受け取ると、子どもの質問に答える。

「共通の友人の悪口を言い合うことぐらい、楽しい事はないぞ」

村長は、少女に流し目を送ると、

「子どもには、悪影響だな」

少女もほほえみを返しながらお菓子を受け取る。

だが、2人ともしばらくは笑うのをやめなかった。

「村長には娘がいるとは聞いていましたが？」

少女は、村長に問いかける。

「こいつは、ちょうど一年前に倒れていたところを見つけてね、家の手伝いをさせている」

「ローズ・レクチャーです」

子どもはゆっくりと頭を下げる。

「セリエだ」

第 4 話 目の前の存在が子どもとは、とても信じる事ができなかった。

「失礼ですが、セリエ様は冒険者ですか」

「ああ、そうだ」

少女は質問に答えると、子どもに視線を移す。

「君は何歳だ？」

「申し訳ありません」

子どもは先ほどよりも深く頭を下げると弁解する。

「とりあえず、8歳ということにしておりますが、正確なところはわかりません」

「ローズは、ここに来るまでの事を覚えていないのだよ」
村長は簡単に一年前の事を説明する。

「なるほどな」

セリエが話を聞き終わると頷いた。

「ローズよ」

「なんでございましたでしょうか」

ローズは直立不動のまま、セリエの話をきいていた。

「どうして、私が冒険者だと思った」

「お一人で来られたからです」

ローズは即答した。

セリエは、意地の悪い笑顔で質問する。

「詳しい説明をしてもらっていいかい」

「少しばかりお時間をいただいでよろしいでしょうか」

ローズは、村長に了解を求めた。

村長は面白そうに許可をあたえる。

「ありがとうございます」

「この村の周辺には、モンスターが出現します。ここ以外でも、同じように出現するとも伺ったことがありますが。通常であれば、十人以上で移動するところを、お一人でここまで来られたことを考えましたら、かなり腕の立つ冒険者であるとしたか考えることができません」

「面白い、子どもだね」

セリエはつぶやくと、ローズに質問する。

「他の人たちが、別のところに行くとは考えないのかな」

「考えませんでした。」

先ほどまで、道具屋の手伝いをしていたところ、ご主人様から呼び出しを受けました。

大勢で来られたら、道具屋が忙しくなることを、ご主人様は承知しております。

にもかかわらず、私を呼び出すのですから、少なくとも全員がご主人様のもとへ訪ねられたと考えました。

あとは、念のため村の子どもにお願いして、門番の人から確認をとりましたが」

「本当に、面白い子どもだね。」

というよりも、本当に子どもなのかい」

セリエの目は笑ってはいなかった。

「よくわかりません。」

この村に来るまでの私は何者であったか、いまだにわかりませんから。

ただ、今はローズ・レクチャーであると自信を持って言えます」

「そうか、済まなかったな」

「セリエ様、お気遣いは無用です。」

同じ事を、ご主人様からも言われますから」

「……。そうだな」

村長は笑っていた。

「ところで、村長よ」

「なんだい、セリエ」

「頼みが有るのだが」

「先生（笑）が来るまで泊めさせてくれ、というのなら構わない。いつものことだ」

私がこの村に来るのが遅れるのは、いつもの事ではない。

私がこの村を訪れるのはまだ、4回目なのだから。

「いつものことなのか。」

まあ、先生（笑）の事ならば納得できる。

感謝する。

だが、私の頼みは別にある」

少女は、そばにいる子どもに視線を移す。

「興味を持ったので、しばらく預からせて欲しい」

村長は驚きの声を上げる。

「何だと！」

だが、すぐに表情を笑顔にすると

「そうか、そうか」

村長は1人納得の声を出す。

「ローズ、セリエの相手をして欲しい」

「……、かしこまりました」

ローズは、セリエと村長を交互に見ながら話を続ける。

「ただ、女性には慣れておりませんので、お気に召すかわかりませんが」

「……」

「……」

村長とセリエはしばらく無言で、ローズを凝視すると、お互いの顔を眺めている。

「村長よ、貴様にそんな趣味があったとは知らなかった。

いや、別に人に迷惑をかけないのであれば、双方合意の上であれば、問題はないが。」

ただ、できれば、知りたくない話だったな」

「セリエ、何か勘違いをしていないか。」

俺は、子どもをもてあそぶような趣味などない」

「知られたからといって、無理に否定しなくても構わないぞ。

村長とのつきあいを変えるつもりはない」

「勘違いするなど、いつている。」

ローズとは、そんな関係ではない！

ローズ、お前から何か言ってくれ」

村長は、怒りを抑えながら、ローズに話をうながす。

「誤解を招くような表現をしたのであれば、謝ります。

申し訳ございません。」

誤解をまねいたのは、女性には慣れておりませんという言葉だったと思います。

私が申し上げたかったことは、この村にはセリエ様のような年齢の女性がおられないので、失礼な事を言ってしまうのではないかと、思ったからであります」

ローズの言葉に、言い合いをしていた2人は急に押し黙った。

「村長よ。」

この子どもに、私の事を話したのか。

だから、私が冒険者であることを知っていたのではないか」

「それはない」

村長は即座に否定する。

「知っていたら、今のような失礼な事を言うはずがない。」

だいたい、セリエが訪れたのは、今回が初めてだ」

「……そうだな。」

ああ、そうだな」

セリエは村長の指摘に納得する。

「セリエ様。」

申し上げてごいません。気にさわるような事を言ってしまったように
で」

子どもは深く頭をさげる。

「ローズよ、気にすることはない。

むしろ、興味がわいた。

しばらく私の話相手になつてくれないか」

セリエは、ローズの目の前に右手を差し出す。

「かしこまりました、セリエ様」

ローズは、頭を下げながら、セリエの右手をしっかりと握りしめた。

第 5 話 覚えた知識がいつ役に立つのかわからない。

「本当に君は、子どもなのかい」

「どのように思われてもかまいません。

それでも、私がローズ・レクチャーであることは変わりませんから」

「・・・。たしかにそうだ。

すまなかつたね」

セリエは目の前の子どもにため息をついた。

子どもは今日何回目だろうと考えたはずだが、口に出すことはなかった。

ローズは、セリエから様々な質問を受ける。

普通であれば、8歳程度の子どもの冒険者の話を聞きたがるはずである。

セリエは、世界各地を回っているため、子どもからせがまれると冒険譚のひとつつやふたつ語り聞かせていた。

子ども達は、冒険者にあこがれの視線を向けるが、セリエは決まって、冒険の厳しさを教える。

死の危険が高い冒険は、普通の人間では無理なのだ。

未来ある子ども達の命を無駄に散らせる訳にはいかない。

「家族を、友人を悲しませてはいけないよ」

セリエは、自分の考えをしっかりと伝える。

だが、ローズはセリエにはほとんど質問はしなかった。

ローズが質問したのは、料理の好みとか、就寝時間や起床時間など、セリエが村長の屋敷の生活を快適に送ることが出来るための質問がほとんどだった。

セリエがローズに他に聞きたいことはと、話を振ると

「最近の村の周辺に出没するモンスターの傾向をお話ししますので、変化が無かったかどうか教えて下さい」であった。

セリエが、「どうしてそのような質問を？」とローズに尋ねると、ローズは、「警備隊の人々に説明するためです」と即答する。

この村の警備隊は、村から盗賊の進入を防いだり、薬草を採取する村人からモンスターの襲撃を守ったりしている。

村の子ども達があこがれる職業と言える。

セリエは次に、「警備隊になりたいの？」と質問すると、

「主人からのご命令が有れば」と即答する。

「なりたくないの？」と、意地悪に質問すると

「この体では、役に立ちませんから」とやんわり否定する。

「体を鍛えたらいいじゃないの？」

「この体で鍛えても、成長は期待できません。」

それに、この年齢で体の動かしかたを定めても、応用が利かなくなりますから」

とすまして、答える。

「強いて言えば、攻撃をかわすための目を鍛えるために、攻撃を回避する訓練ならば受けたいですね」

と、言つてのける。

セリエは「なら、魔法の練習は？」としつこく食い下がる。

「魔法ですか。」

見たことがないので、判断できかねます」

「役に立つわよ、いろいろと」

今度は、セリエが話し始めた。

「万能ではないけれど、傷を癒したり、モンスターを倒したりできるわよ」

「そうですね」

ローズは、しばらく考え込んでいた。

「確かに便利そうですが、自分自身がその能力を覚えるだけの価値があるかわかりませんね。」

場合によっては、人にお願ひした方が効率的なようですし」

「あなた、何者なの？」

「ローズ・レクチャーです」

「わかっているわよ」

「それならばよろしいのですが」

ため息をつきそうな表情だ。

だが、この子どもはそんなことはしない。

だからこそ、余計にセリエは腹を立てている。

「ともかく、魔法が使える可能性が高いかどうか確認してみよう」
「そうですね。」

自分に何が出来るのかわかった方がいいでしょう。

ぜひお願いします」

「素直なだけで、なにか腹が立つ」

セリエは頬をふくらませた。

「魔法の基本的な発動方法については、知っているかしら」

「詠唱魔法、動作魔法、媒体魔法ですね」

「知っているの？」

「勉強しましたから」

ローズは、そう話すと「魔法の基本について」に記載された内容を話し出す。

あの本は、魔法の知識がないものでも理解しやすいよう、私が物語形式にしたのだ。

この世界で最も売れた本の一つだ。

「関係ないエピソードが多すぎでしたね」

「合法的な、魔法使用による風呂ののぞきかたの話なんか、最低よね」

あのエピソードがなかったら、魔法の使用制限に関する法律や防衛するための魔法の開発が、あそこまで革新的に発達はしなかったはずだ。

ちなみに、記載された内容のとおりに行うと、現行法ではきちんと処罰される。

魔法が使用できるからといっても、よい子のみんなはまねをしないように。

「なら、魔法の勉強も不要ね」

「すいません。」

勉強したというのは、文字の読み書きの方法です。

本に何が書かれているのかはわかりましたが、実践できるかどうかは別問題だと考えていますので」

「もう、わかったわ」

セリエはあきらめた口調をする。

「念のため、確認するけど、本当に魔法は使えないわよね」

「ええ、適切な導師がしなければ、魔法事故が発生したときに困りますから」

ローズは当然といった顔で答える。

「ローズなら、魔法が使えると言われても信じてしまっわ」

「私は、ふつうの村人ですよ」

「ふつうの村人が、そこまで理解できないわよ」

「うちの村の識字率を甘く見ていませんか」

「文字が読めることと、その内容を理解することは別の話よ」

「確かにそうですが」

「それとも、魔法の訓練よりも議論のほうがしたいのかしら」

「それもたのしそうですが、

優先順位としては魔法の習得が先のようなですね」

「出発するわよ、ローズ」

セリエとローズは、村長の家を後にした。

第 6 話 魔法の初歩について教わった。

「魔法の定義については、知っているわよね」

「魔素を用いて、事象を改変させる行為の事ですね」

「そのとおり」

ローズとセリエは草原のなかにいた。

「まあ、知識が十分に有るようなので問題なさそうね」

「私の身につけた知識が、正しいのかどうか、確証が持てません。ぜひご教授願います」

「話す内容が論理的に問題が無いだけに反論しづらいのだが・・・」
セリエは目の前の子どもを眺める。
どうみても、6歳程度だ。

目の前にいる子どもを外見が信じられなくなる。

「話し方がお気に召さないようですね。」

あまり、慣れない口調なので、気が進みませんが。

せんせい。おねがいます」

ローズは突然、口調を見た目に合わせた内容に変えるとともに、ひよこりと頭を下げた。

「か、かわいい」

セリエが思わず口を滑らせると、

「だから、いやだったのに」

ローズは口をとがらせる。

「反則よ、それは」

セリエは思わずローズを抱きしめる。

が、一瞬で体をローズから離れる。

「教えていただけられないようですので、口調を戻させて頂きます」

ローズは一礼するが、先ほどのお辞儀とは異なり、あくまでも業務

上の礼節であった。

「教えるから、ちゃんと教えるから」

「お礼は、教えてもらってからにします」

「仕方ないわね」

「魔法の定義については理解しているようだが、魔素により事象を
改変させるためには、どうすればいいか知っているの」

「改変式、通称サークルの生成ですね」

「そのとうりだ」

「実際に生成したところを見たことはありません」

この村には、魔法を使える者がいなかった。

というよりも、魔法についての教育を受けることができる教育機関
が限られているからだ。

この国には、国内の主要都市に一つずつ魔法学園が設置されている。

基本的な魔法について、中等部で学習することでようやく、魔法の
基本と初等魔法を使用することが出来るのだ。

魔法学園に入学するためには、多額の資金が必要であるため、少な
くともこの国での魔法使用率は少ない。

「そうよね。」

では、教えてあげる」

目の前に、金色に光る三重の円とその中に二つの三角形が円に接し
た大きさで入っている。

日本では「ペンタグラム」「六芒星」と呼ばれている形状だ。

無論私は、こちらの世界では、別の言葉でこの形状を表現すること
を知っている。

しかしながら、人名や地名を除いて、こちらの世界での名称を用いる理由を私は見いだすことが出来ない。

「サークルと呼ばれる理由は、改変式の形状による」
セリエは説明を続けた。

「通常は、このサークルを見ることが出来ないけど、二つの方法で目視が可能となるわ」

「一つめが、表示魔法ですね」
ローズが答える。

「そのとおり。」

この魔法は、純粋に表示のみを行う最低限の改変式で構成されている」

「頭の中で、構成する改変式をイメージし、体内の魔素を用いて改変式を具現化する。」

具現化した改変式に魔素が満ちることで、改変式が発動し、魔法が行使されるのだ」

「もう一つは、探知魔法よ」

「目が」

ローズは、セリエの目を見ると、サークルと同様に金色に輝いていた。

「相手がどのような魔法を使用するのかわかれば当然、対応しやすくなるわね」

ローズは頷く。

「とはいえ、今現在魔法使いを相手にすることはできないけどね」

「そうですね、ですので私が知りたいことは魔法の習得する方法と魔力の底上げ方法ですね」

「魔法を習得する方法については、キチンとした指導者で修行する

「しかないわね」

「教えてはもらえないのですね」

ローズは残念そうに答える。

「そうね。」

相手にするのは楽しそうだけど、本来の目的があるからね。

先生（笑）が来るまでは暇なのだけど」

「魔力の引き上げ方法なら、教えるのは簡単ね」

「それでしたら、ぜひ」

「一番簡単な方法は、日頃から魔力を行使する事ね。」

「一番簡単な改変式を教えるから、毎日使いなさい」

「お願いします」

「まずは、改変式の作り方を教えるわね。」

これが出来たら、とりあえず魔法は使えるようになるわ」

セリエはローズの右手を握る。

「あなたの魔力を消費して、改変式を生成するわね」

やがて目の前に、最初に起動した改変式が現れた。

「今、改変式を発動したとき、頭の中に改変式と同じイメージが思

い浮かんだ？」

ローズは頷いた。

「ならば、魔法を使用できる素質は有るようね」

ローズは笑顔を見せた。

セリエは思わずローズを抱きしめようとしたが、ローズがいつもの

表情に戻ったので、慌てて話を続ける。

「そ、そうね。」

さっきの感覚を思い出しながら頭の中で改変式を思い浮かべてみて」

セリエは、ローズの手を離すと、改変式の生成を促した。

再び、先ほどと同様の改変式が現れた。

「・・・」

すごいわね。

一度で、ここまで再現できるなんて

セリエは感嘆の声を上げる。

「本当は使えたとか、言わないでよ」

「そんなことはありません」

ローズは、即座に否定する。

言葉を発するとすぐに、改変式は消失した。

「あとは、集中しなくても使用できるように努力してね」

「・・・。わかりました」

ローズは頷いた。

「まあ、実際には呪文によって発動できるように、頭の中に改変式を仕込んでおくのが一般的なのだけだ。

魔法の構造をキチンと把握するためには、基礎を積むのが一番ね」
セリエは、訓練の続きを説明する。

「そして、魔力がついたら、改変式を大きくすると良いわ」

セリエは、先ほどの改変式と比べて直径が2倍の大きさの改変式を生成する。

「これくらいの大きさなら、本来は大気中の魔素を利用する改変式を組み込むほうが良いけど、練習だからね」

そう言つて、改変式を消し去った。

「2倍になると、約8倍の魔力を消費するわね」

「直径が2倍なら、面積が4倍になるので、魔力消費は4倍になるのでは」

ローズが指摘する。

「確かに、面積は4倍になるけど、伝導効率がだいたい半分になるので、8倍になるのよ」

「失礼しました」

ローズは素直に謝った。

「疑問に感じることはいいことよ」

セリエは機嫌良く答えると、

「じゃあ、今日の講義はここまでね」

「せんせい、ありがとうございました」

ローズは、ひよっこりと頭をさげる。

ローズは、セリエの願いを忘れていなかったようだ。

「だめ、かわいすぎる」

セリエはローズを後ろから抱きしめた。

「暑苦しいのですが」

「・・・。かわいくない奴だ」

セリエは、ローズから離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259x/>

箱庭で異彩を放つ花 ローズ・レクチャー伝

2011年12月29日12時50分発行